

觀普賢菩薩行法經

是の如きを我聞きき、一時、佛、毗舍離國、大林精舍、重閣講堂に在して、諸の比丘に告げたまわく、

却つて後三月あつて、我當に般涅槃すべし。

尊者阿難、即ち座より起つて衣服を整え、手を又え合掌

して、佛を遶ること三帀して、佛の爲に禮を作し、胡跪し

合掌して、諦かに如來を觀たてまつりて目暫くも捨てず。

長老摩訶迦葉、彌勒菩薩摩訶薩も亦座より起つて、合掌し禮

を作して尊顔を瞻仰したてまつる。

時に三大士、異口同音にして佛に白して言さく、

世尊、如來の滅後に云何してか衆生、菩薩の心を起し、

大乘方等經典を修行し、正念に一實の境界を思惟せん。

云何してか無上菩提の心を失わざらん。云何してか復當に

煩惱を斷ぜず五欲を離れずして、諸根を淨め諸罪を滅除する

ことを得、父母所生の清淨の常の眼、五欲を斷ぜずして而

も能く諸の障外の事を見ることを得べき。

佛、阿難に告げたまわく、

諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。如來昔、

耆闍崛山及び餘の住處に於て、已に廣く一實の道を分別せし

かども、今此の處に於て、未來世の諸の衆生等の大乘

無上の法を行ぜんと欲せん者、普賢の行を學し普賢の行を

行ぜんと欲せん者の爲に、我今當に其の所念の法を説くべ

し。若しは普賢を見及び見ざる者の罪數を除却せんこと、今

汝等が爲に當に廣く分別すべし。

阿難、普賢菩薩は乃ち東方の淨妙國土に生ぜり。其の

國土の相は雜華經の中に已に廣く分別せり。我今此の經に於

て略して解説せん。阿難、若し比丘、比丘尼、優婆塞・
 優婆夷、天、龍、八部一切衆生の大乗を誦せん者、大乗を
 修せん者、大乘の意を發せん者、普賢菩薩の色身を見んと樂
 わん者、多寶佛の塔を見たてまつらんと樂わん者、
 釋迦牟尼佛及び分身の諸佛を見たてまつらんと樂わん者、六
 根清淨を得んと樂わん者は、當に是の觀を學すべし。此の觀
 の功德は、諸の障礙を除いて上妙の色を見る。三昧に入ら
 ざれども、但誦持するが故に、心を専らにして修習し、
 心心相次いで大乘を離れざるごと、一日より三七日に至れば
 普賢を見ることを得。重き障ある者は、七七日の後然して後
 に見ることを得、復重きことある者は一生に見ることを得、
 復重きことある者は二生に見ることを得、復重きことある者
 は三生に見ることを得。是の如く種種に業報不同なり、是の
 故に異説す。

普賢菩薩は身量無邊、音聲無邊、色像無邊なり。此の國
 に來らんと欲して自在神通に入り、身を促めて小ならしむ。
 閻浮提の人は三障重きが故に、智慧力を以て化して白象に乗
 れり。其の象に六牙あり、七支地を跂えたり。其の七支の下
 に七蓮華を生ぜり。其の象の色鮮白なり、白の中に上れたる
 者なり。頗黎雪山も比とすることを得ず。象の身の長さ四百
 五十由旬、高さ四百由旬。六牙の端に於て六つの浴池あり。
 一一の浴池の中に十四の蓮華を生ぜり、池と正等なり。其の
 華開敷せること天の樹王のごとし。一一の華の上に一人の
 玉女あり。顔色紅の如くにして、暉天女に過ぎたるあり。
 手の中に自然に五つの箜篌を化せり。一一の箜篌に五百の
 樂器あり以て眷屬とせり、五百の鳥あり。鳧、雁、鴛鴦、皆
 衆寶の色にして、華葉の間に生ぜり。象の鼻に華あり、其の

莖譬えば赤眞珠の色の如し。其の華金色にして含んで未だ敷
けず。

是の事を見已つて復更に懺悔し、至心に諦觀して大乘を
思惟すること心に休廢せざれば、華を見るに即ち敷け金色に
金光あり。

其の蓮華臺は是れ甄叔迦寶、妙梵摩尼を以て華臺とし、
金剛寶を以て華鬚とせり。化佛有せるを見るに蓮華臺に坐し
たまえり。衆多の菩薩、蓮華鬚に坐せり。化佛の眉間より亦
金色の光を出して象の鼻の中に入る。紅蓮華の色にして象の
鼻の中より出でて象の眼の中に入り、象の眼の中より出でて
象の耳の中に入り、象の耳より出でて象の頂上を照らして化
して金臺と作る。象の頭の上に當つて三化人あり、一りは
金輪を捉り、一りは摩尼珠を持ち、一りは金剛杵を把れり。
杵を擧げて象に擬するに象即ち能く行歩す。脚地を履まず、
虚を躡んで遊ぶ。地を離ること七尺、地に印文あり。印文
の中に於て千輻轂輞皆悉く具足せり。一一の輞間に一の大
蓮華を生ず。此の蓮華の上に一の化象を生ぜり。亦七支あ
り、大象に隨つて行く。足を擧げ足を下すに七千の象を生
ず。以て眷屬となして大象に隨從せり。象の鼻紅蓮華の色な
る、上に化佛有して眉間の光を放ちたもう。其の光金色にし
て前の如く象の鼻の中に入り、象の鼻の中より出でて象の眼
の中に入り、象の眼の中より出でて還つて象の耳に入り、象
の耳より出でて象の頂上に至る。漸々に上り象の背に至
り、化して金鞍と成つて七寶校具せり。鞍の四面に於て七寶
の柱あり、衆寶校飾して以て寶臺を成せり。臺の中に一の七
寶の蓮華鬚あり。其の蓮華鬚は百寶をもつて共に成ぜり。其
の蓮華臺は是れ大摩尼なり。

一人の菩薩あり、結跏趺坐せり、名を普賢という。身白玉の色にして五十種の光あり。光に五十種の色あり、以て頂光と爲す。

身の諸の毛孔より金光を流出す。其の金光の端に無量の化佛まします。諸の化菩薩を以て眷屬と爲せり。安詳として徐くに歩み、大なる寶蓮華を雨らして行者の前に至らん。其の象口を開くに、象の牙の上に於て、諸池の玉女鼓樂絃歌す。其の聲微妙にして大乘一實の道を讚歎す。

行者見已つて歡喜し敬禮して、復更に甚深の經典を讀誦し遍く十方無量の諸佛を禮し、多寶佛塔及び釋迦牟尼佛を禮したてまつり并に普賢、諸の大菩薩を禮して、是の誓願を發す。

若し我宿福あらば應に普賢を見たてまつるべし。願わくは尊者遍普、我に色身を示したもうべしと。

是の願を作し已つて、晝夜六時に十方の佛を禮し懺悔の法を行じ、大乘經を讀み大乘經を誦し、大乘の義を思ひ大乘の事を念じ、大乘を持つ者を恭敬し供養し、一切の人を視ること猶お佛の想の如くし、諸の衆生に於て父母の想の如くせよ。

是の念を作し已りなば、普賢菩薩即ち眉間より大人相白毫の光明を放たん。此の光現する時に、普賢菩薩身相端嚴にして紫金山の如く、端正微妙にして三十二相皆悉く備え有てらん。

身の諸の毛孔より大光明を放ち、其の大象を照らして金色とならしめん。一切の化象も亦金色となり、諸の化菩薩も亦金色と作らん。其の金色の光東方無量の世界を照らすに、皆同じく金色とならん。南西北方四維上下も亦復是の如し。

爾の時に十方、一一の方に於て一りの菩薩の六牙の白象王に乗れるあり。亦普賢の如く等しくして異なることあることなけん。是の如く十方無量無邊の中に満てる化象も、普賢菩薩の神通力の故に、持經者をして皆悉く見ることを得せしめん。

是の時に行者、諸の菩薩を見て身心歡喜して、其の爲に禮を作して白して言さく、

大慈大悲者、我を愍念したもうが故に我が爲に法を説きたまえと。

是の語を説く時に、諸の菩薩等異口同音に各清淨の大乗經法を説いて、諸の偈頌を作つて行者を讚歎すべし。是れを始めて普賢菩薩を觀ずる最初の境界と名づく。

爾の時に行者是の事を見已つて、心に大乘を念じて晝夜に捨てざれば、睡眠の中に於て、夢に普賢其の爲に法を説くと見ん。覺の如くにして異なることなく、其の心を安慰して是の言を作さん、

汝が誦持する所、是の句を忘失し是の偈を忘失せりと。

爾の時に行者、普賢の深法を説くことを聞いて其の義趣を解し、憶持して忘れじ。日日に是の如くして其の心漸く利ならん。

普賢菩薩其れをして十方の諸佛を憶念せしめん。普賢の教に隨つて正心、正憶にして、漸く心眼を以て東方の佛の身黄金の色にして端嚴微妙なるを見たてまつらん。一佛を見たてまつり已つて、復一佛を見たてまつらん。是の如く漸々に遍く東方の一切の諸佛を見たてまつり、心想利なるが故に、遍く十方の一切の諸佛を見たてまつらん。諸佛を見たてまつり已つて、心に歡喜を生じて、是の言を作さく、

大乘に因るが故に大士を見ることが得、大士の力に因るが故に諸佛を見たてまつることを得たり。諸佛を見たてまつると雖も、猶お未だ了々ならず。目を閉ずれば則ち見、目を開けば則ち失う。

是の語を作し已って、五體を地に投じて遍く十方の佛を禮せん。諸佛を禮し已って、胡跪し合掌して是の言を作せ、諸佛世尊は十力、無畏、十八不共法、大慈、大悲、三念處まします。常に世間に在して色の中の上色なり。我何の罪あつて見たてまつることを得ざると。

是の語を説き已って復更に懺悔せよ。懺悔清淨なること已りなば、普賢菩薩復更に現前して行、住、坐、臥に其の側を離れず。乃至夢の中にも常に爲に法を説かん。此の人覺め已つて法喜の樂を得ん。是の如くして晝夜三七日を経て、然して後に方に旋陀羅尼を得ん。陀羅尼を得るが故に、諸佛、菩薩の所説の妙法憶持して失わじ。亦常に夢に過去の七佛を見たてまつらんに、唯釋迦牟尼佛のみ其れが爲に法を説きたまわん。是の諸の世尊、各各に大乘經典を稱讚したまわん。

爾の時に行者復更に歡喜して、遍く十方の佛を禮せん。十方の佛を禮し已りなば、普賢菩薩其の人の前に住して、教えて宿世の一切の業縁を説いて、黒惡の一切の罪事を發露せしめん。諸の世尊に向いたてまつり、口に自ら發露せよ。既に發露し已りなば、尋いで時に即ち諸佛現前三昧を得ん。是の三昧を得已つて、東方の阿閼佛及び妙喜國を見たてまつること了々分明ならん。

是の如く十方各諸佛の上妙の國土を見ることが了々分明ならん。

既に十方の佛を見たてまつり已つて、夢むらく、象の頭の上に一りの金剛人あり、金剛の杵を以て遍く六根に擬す。六根に擬し已りなば、普賢菩薩、行者の爲に六根清淨懺悔の法を説かん。

是の如く懺悔すること、一日より三七日に至らん。諸佛現前三昧の力を以ての故に、普賢菩薩の説法莊嚴の故に、耳漸々に障外の聲を聞き、眼漸々に障外の事を見、鼻漸々に障外の香を聞かん。廣く説くこと妙法華經の如し。是の六根清淨を得已つて、身心歡喜して諸の惡想なけん。心を是の法に純らにして法と相應せん。復更に百千萬億の旋陀羅尼を得。復更に廣く百千萬億無量の諸佛を見たてまつらん。

是の諸の世尊各の右の手を申べて、行者の頭を摩でて是の言を作したまわん。

善哉善哉、大乘を行ずる者、大莊嚴の心を發せる者、大乘を念ずる者なり。我等昔日菩提心を發せし時皆亦是の如し。汝懃懃にして失わざれ。我等先世に大乘を行ぜしが故に、今清淨正遍知の身と成れり。汝今亦當に勤修して懈らざるべし。此の大乗經典は諸佛の寶藏なり。十方三世の諸佛の眼目なり。三世の諸の如來を出生する種なり。此の經を持つ者は、即ち佛身を持ち、即ち佛事を行ずるなり。當に知るべし、是の人は即ち是れ諸佛の所使なり。諸佛世尊の衣に覆われ、諸佛如來の眞實の法の子なり。汝大乘を行じて法種を斷たざれ。汝今諦かに東方の諸佛を觀じたてまつれ。

是の語を説きたもう時、行者即ち東方の一切無量の世界を見る。地の平かなること掌の如し。諸の堆阜、嶽陵、荆棘なく、瑠璃をもつて地とし、黄金をもつて側を

間てたり。十方世界も亦復是の如し。是の事を見已つて即ち
 寶樹を見ん。寶樹高妙にして五千由旬なり。其の樹常に
 黄金、白銀を出して七寶莊嚴せり。樹下に自然に寶の
 師子座あり。其の師子座の高さ二千由旬ならん。其の座の上
 に亦百寶の光明を出さん。是の如く諸樹及び餘の寶座、一
 の寶座に皆百寶の光明あらん。是の如く諸樹及び餘の寶座、
 一一の寶座に皆自然の五百の白象あらん。象の上に皆普賢
 菩薩有さん。

爾の時に行者諸の普賢を禮して、是の言を作せ、
 我何の罪あつてか但寶地、寶座及び寶樹を見て、諸佛を見
 たてまつらざると。

是の語を作し已りなば、一一の座の上に一りの世尊ましま
 さん。端嚴微妙にして寶座に坐したまえり。諸佛を見たてま
 つり已つて心大いに歡喜して、復更に大乘經典を誦習せ
 ん。大乘の力の故に、空中に聲あつて讚歎して言わく、
 善哉善哉、善男子、汝大乘を行ずる功德の因縁に、能く
 諸佛を見たてまつる。今諸佛世尊を見たてまつることを得た
 りと雖も、而も釋迦牟尼佛、分身の諸佛及び多寶佛塔を見た
 てまつること能わず。

空中の聲を聞き已つて、復勤めて大乘經典を誦習せん。
 大乘方等經を誦習するを以ての故に、即ち夢中に於て
 釋迦牟尼佛、諸の大衆と耆闍崛山に在して、法華經を説き
 一實の義を演べたもうを見ん。教え已りなば懺悔し渴仰して
 見たてまつらんと欲し、合掌胡跪して耆闍崛山に向つて是の
 言を作せ。

如來世雄は常に世間に在す。我を愍念したもうが故に我が
 爲に身を現じたまえ。

是の語を作し已つて耆闍崛山を見るに、七寶莊嚴して無數の比丘聲聞大衆あり。寶樹行列して寶地平正なり。復妙寶師子の座を敷けり。釋迦牟尼佛眉間の光を放ちたもう。其の光遍く十方世界を照らし、復十方無量の世界を過ぐ。此の光の至る處の十方分身の釋迦牟尼佛一時に雲のごとく集り、廣く妙法を説きたもうこと妙法華經の如し。一一の分身の佛身は紫金の色なり。身量無邊にして師子の座に坐したまへり。百億無量の諸大菩薩を以て眷屬とせり。一一の菩薩、行、普賢に同じ。此の如く十方無量の諸佛、菩薩の眷屬も亦復是の如し。大衆雲集し已つて釋迦牟尼佛を見たてまつれば、擧身の毛孔より金色の光を放ちたもう。一一の光の中には百億の化佛有す。諸の分身の佛眉間の白毫大人相の光を放ちたもう。其の光釋迦牟尼佛の頂に流入す。此の相を見る時、分身の諸佛一切の毛孔より金色の光を出したもう。一一の光の中に復恆河沙微塵數の化佛有す。

爾の時に普賢菩薩、復眉間の大人相の光を放つて行者の心に入れん。既に心に入り已りなば、行者自ら過去無數百千の佛の所にして大乘經典を受持し讀誦せしことを憶し、自ら故の身を見ること了々分明ならん。宿明通の如く等しくして異なることあることなけん。豁然として大悟し、旋陀羅尼、百千萬億の諸の陀羅尼門を得ん。三昧より起つて、面り一切の分身の諸佛、衆の寶樹の下に師子の牀に坐したまえるを見たてまつらん。復瑠璃の地の蓮華聚の如く下方の空中より踊出するを見ん。一一の華の間に微塵數の菩薩あつて結跏趺坐せん。亦普賢の分身の菩薩、彼の衆の中に在つて大乘を讚説するを見ん。

時に諸の菩薩、異口同音に行者をして六根を清淨なら

しめん。

或は説言あらん、汝當に佛を念ずべし。

或は説言あらん、汝當に法を念ずべし。

或は説言あらん、汝當に僧を念ずべし。

或は説言あらん、汝當に戒を念ずべし。

或は説言あらん、汝當に施を念ずべし。

或は説言あらん、汝當に天を念ずべし。

此の如き六法は是れ菩提心なり、菩薩を生ずる法なり。汝今應當に諸佛の前に於て、先の罪を發露し至誠に懺悔すべし。

無量世に於て、眼根の因縁をもつて諸色に貪著す。色に著

するを以ての故に諸塵を貪愛す。塵を愛するを以ての故に

女人の身を受けて、世世に生ずる處に諸色に惑著す。色汝

が眼を壞つて恩愛の奴となる。故に色汝をして三界を

經歷せしむ。此の幣使を爲つて盲にして見る所なし。今

大乘方等經典を誦す。此の經の中に十方の諸佛色身滅せず

と説く。汝今見ることを得つ、審實にして爾りや不や。眼根

不善汝を傷害すること多し。我が語に隨順して、諸佛、

釋迦牟尼佛に歸向したてまつり、汝が眼根の所有の罪咎を説

け。諸佛、菩薩の慧眼の法水、願わくは以て洗除して、我を

して清淨ならしめたまえと。

是の語を作し已つて遍く十方の佛を禮し、釋迦牟尼佛、

我が今懺する所の眼根の重罪、障蔽穢濁にして盲にして

見る所無し。願わくは佛大慈をもつて哀愍覆護したまえ。

普賢菩薩、大法船に乗つて、普く一切の十方無量の諸の

菩薩の伴を渡したもう。唯願わくは哀愍して我が眼根の不善

惡業障を悔過する法を聽したまえ。

是の如く三び説いて五體を地に投じて大乘を正念して心に忘捨せざれ。是れを眼根の罪を懺悔する法と名づく。諸佛の名を稱し焼香、散華して、大乘の意を發し繪、旛、蓋を懸けて、眼の過患を説き罪を懺悔せば、此の人現世に釋迦牟尼佛を見たてまつり、及び分身、無量の諸佛を見たてまつり、阿僧祇劫に惡道に墮ちじ。大乘の力の故に、大乘の願の故に、恒に一切の陀羅尼菩薩と共に眷屬と爲らん。是の念を作す者は是れを正念とす。若し他念する者を名づけて邪念とす。是れを眼根初境界の相と名づく。眼根を淨むること已つて、復更に大乘經典を讀誦し、晝夜六時に胡跪し懺悔して是の言を作せ、

我今云何ぞ但釋迦牟尼佛、分身の諸佛を見たてまつりて、多寶佛の塔全身の舍利を見たてまつらざる。多寶佛の塔は恒に在して滅したまわず。我濁惡の眼なり、是の故に見たてまつらず。

是の語を作し已つて、復更に懺悔せよ。七日を過ぎ已つて、多寶佛の塔、地より涌出したまわん。釋迦牟尼佛即ち右の手を以て其の塔の戸を開きたまわん。多寶佛を見たてまつれば普現色身三昧に入りたまえり。一一の毛孔より恆河沙微塵數の光明を流出したもう。一一の光明に一一に百千萬億の化佛います。此の相現する時、行者歡喜して讚偈をもつて塔を遶らん。七帀を満て已りなば、多寶如來大音聲を出して、讚めて言わく、

法の子、汝今眞實に能く大乘を行じ、普賢に隨順して眼根懺悔す。是の因縁を以て、我汝が所に至つて汝が證明と爲る。

是の語を説き已つて、讚めて言わく、善哉善哉、釋迦牟尼佛、能く大法を説き大法の雨を雨らし、濁惡の諸の衆生等を成就したもう。

是の時に行者、多寶佛塔を見已つて、復普賢菩薩の所に至つて、合掌し敬禮して白して言さく、

大師、我に悔過を教えたまえ。

普賢復言わく、

汝多劫の中に於て、耳根の因縁をもつて外聲に隨逐して、妙音を聞く時は心に惑著を生じ、惡聲を聞く時は百八種の煩惱の賊害を起す。此の如き惡耳の報、惡事を得。恒に惡聲を聞いて諸の攀縁を生ず。顛倒して聽くが故に、當に惡道、邊地、邪見の、法を聞かざる處に墮すべし。汝今日に於て大乘の功德海藏を誦持す。是の因縁を以ての故に十方の佛を見たてまつる。多寶佛塔は現じて汝が證と爲りたまふ。汝自ら當に己が過惡を説いて諸罪を懺悔すべし。

是の時行者、是の語を聞き已つて、復更に合掌して五體を地に投じて是の言を作せ、

正遍知世尊、現じて我が證と爲りたまえ。方等經典は爲れ慈悲の主なり。唯願わくは我を觀、我が所説を聽きたまえ。

我多劫より乃至今身まで、耳根の因縁をもつて聲を聞いて惑著すること、膠の艸に著くが如し。諸の惡聲を聞く時は煩惱の毒を起し、處處に惑著して暫くも停まる時なし。此の弊聲を出して我が識神を勞し、三途に墜墮せしむ。今始めて覺知して、諸の世尊に向いたてまつりて發露懺悔すと。

既に懺悔し已つて、多寶佛の大光明を放ちたもうを見たまつらん。其の光金色にして遍く東方及び十方界を照らしたまう。無量の諸佛身眞金の色なり。東方の空中に是の唱言を

作す、

此に佛世尊まします。號を善徳という。亦無數の分身の

諸佛あり、寶樹下の師子座上に坐して結跏趺坐したまえり。

是の諸の世尊の一切皆普現色身三昧に入りたまえる、皆是の

言を作して、讚めて言わく、

善哉善哉、善男子、汝今大乘經典を讀誦す。汝が誦する

所は是れ佛の境界なり。

是の語を説き已りなば普賢菩薩更に爲に懺悔の法を説か

ん。汝先世無量劫の中に於て、香を貪るを以ての故に、分別

諸識處處に貪著して、生死に墮落せり。汝今應當に大乘の

因を觀ずべし。大乘の因とは諸法實相なりと。

是の語を聞き已つて、五體を地に投じて復更に懺悔せよ。

既に懺悔し已つて當に是の語を作すべし、

南無釋迦牟尼佛、南無多寶佛塔、南無十方釋迦牟尼佛分身

諸佛と。

是の語を作し已つて、遍く十方の佛を禮したてまつれ、

南無東方善徳佛及び分身諸佛と。眼に見る所の如くして一一

に心をもつて禮し、香華をもつて供養し、供養すること畢つ

て胡跪し、合掌して、種種の偈を以て諸佛を讚歎したてまつ

り既に讚歎し已つて、十惡業を説いて諸罪を懺悔せよ。既に

懺悔し已つて是の言を作せ、

我先世無量劫の時に於て、香、味、觸を貪つて衆惡を造作

せり。是の因縁を以て、無量世より來、恒に地獄、餓鬼、

畜生、邊地、邪見の諸の不善の身を受く。此の如き惡業を

今日發露し、諸佛正法の王に歸向したてまつりて説罪懺悔す

と。既に懺悔し已つて身心懈らずして復更に大乘經典を讀誦

せよ。

大乘の力の故に空中に聲あつて告げて言わく、

法の子、汝今應當に十方の佛に向いたてまつりて大乘の法を讚説し、諸佛の前に於て自ら己が過を説くべし。諸佛如來は是れ汝が慈父なり。汝當に自ら舌根の所作の不善惡業を説くべし。

此の舌根は惡業の想到動ぜられて、妄言綺語、惡口兩舌、誹謗妄語、邪見の語を讚歎し、無益の語を説く。是の如き衆多の諸の雜惡業、鬪違壞亂し法を非法と説く。是の如き衆罪を今悉く懺悔すと。

諸の世雄の前にして是の語を作し已つて、五體を地に投じて遍く十方の佛を禮したてまつり合掌長跪して當に是の語を作すべし、

此の舌の過患無量無邊なり。諸の惡業の刺は舌根より出ず。正法輪を斷ずること此の舌より起る。此の如き惡舌は功德の種を斷ず。非義の中に於て多端に強いて説き、邪見を讚歎すること火に薪を益すが如し。猶お猛火の衆生を傷害するが如し。毒を飲める者の瘡疣なくして死するが如し。是の如き罪報、惡邪不善にして、當に惡道に墮すること百劫千劫なるべし。妄語を以ての故に大地獄に墮す。我今南方の諸佛に歸向したてまつりて、過罪を發露せん。是の念を作す時空中に聲あらん。

南方に佛います、梅檀徳と名づけたてまつる。彼の佛に亦無量の分身います、一切の諸佛皆大乘を説いて罪惡を除滅したもう。此の如き衆罪を、今十方無量の諸佛大悲世尊に向いたてまつりて、黒惡を發露し誠心に懺悔せよ。

是の語を説き已りなば、五體を地に投じて復諸佛を禮した

てまつれ。是の時に諸佛、復光明を放つて行者の身を照らして、其の身心をして自然に歡喜せしめ、大慈悲を發し普く一切を念ぜしめん。爾の時に諸佛、廣く行者の爲に大慈悲及び喜捨の法を説き、亦愛語を教え六和敬を修せしめん。爾の時に行者、此の教敕を聞き已つて心大いに歡喜して、復更に誦習して終に懈怠せざらん。空中に復微妙の音聲あつて、是の如き言を出さん、

汝今應當に身心に懺悔すべし。身とは殺、盜、姪、心とは諸の不善を念ずる、十惡業及び五無間を造ること、猶お猿猴のごとく亦麴膠の如く、處處に貪著して遍く一切六情根の中に至る。此の六根の業、枝條華葉悉く三界、二十五有、一切の生處に満てり。亦能く無明、老、死、十二の苦事を增長す。八邪、八難、中に經ざることなし。汝今應當に是の如き惡不善の業を懺悔すべし。

爾の時に行者此の語を聞き已つて、空中の聲に問い奉る、

我今何れの處にしてか懺悔の法を行ぜんと。

時に空中の聲即ち是の語を説かん、釋迦牟尼佛を毗盧遮那遍一切處と名づけたてまつる。其の佛の住處を常寂光と名づく。常波羅蜜に攝成せられたる處、我波羅蜜に安立せられたる處、淨波羅蜜の有相を滅せる處、樂波羅蜜の身心の相に住せざる處、有無の諸法の相を見ざる處、如寂解脫、乃至般若波羅蜜なり。是の色常住の法なるが故に。是の如く應當に十方の佛を觀じたてまつるべし。

時に十方の佛、各右の手を申べて行者の頭を摩でて、是の如き言を作したまわん。

善哉善哉、善男子、汝今大乘經を讀誦するが故に、十方

の諸佛懺悔の法を説きたもう。菩薩の所行の結使を斷ぜず使海に住せず。心を觀ずるに心なし。顛倒の想より起る。此の如き相の心は妄想より起る。空中の風の依止する處なきが如し。是の如き法相は生ぜず没せず。何者が是れ罪、何者が是れ福、我が心自ら空なれば罪、福も主なし。一切の法は是の如く住なく壞なし。是の如き懺悔は心を觀ずるに心なし。法も法の中に住せず。諸法は解脱なり、滅諦なり、寂靜なり。是の如き相をば大懺悔と名づけ、大莊嚴懺悔と名づけ、無罪相懺悔と名づけ破壊心識と名づく。此の懺悔を行ずる者は、身心清淨にして法の中に住せざること、猶お流水の如し。念念の中に普賢菩薩及び十方の佛を見たてまつることを得ん。

時に諸の世尊、大悲光明を以て行者の爲に無相の法を説きたもう。行者、第一義空を説きたもうを聞き奉らん。行者聞き已つて心驚怖せず。時に應じて即ち菩薩の正位に入らん。佛、阿難に告げたまわく、是の如く行ずるをば名づけて懺悔とす。此の懺悔とは十方の諸佛、諸大菩薩の所行の懺悔の法なり。

佛、阿難に告げたまわく、佛の滅度の後、佛の諸の弟子若し惡不善業を懺悔するとあらば、但當に大乘經典を讀誦すべし。此の方等經は是れ諸佛の眼なり。諸佛は是れに因つて五眼を具することを得たまえり。

佛の三種の身は方等より生ず。是れ大法因なり。涅槃海を印す。此の如き海中より能く三種の佛の清淨の身を生ず。此の三種の身は人・天の福田、應供の中の最なり。其れ大方等

經典を讀誦することあらば、當に知るべし。此の人は佛の
功德を具し、諸惡永く滅して佛慧より生ずるなり。

爾の時に世尊、而も偈を説いて言わく、

若し眼根の惡あつて 業障の眼不淨ならば

但當に大乘を誦し 第一義を思念すべし

是れを眼を懺悔して 諸の不善業を盡くすと名づく

耳根は亂聲を聞いて 和合の義を壞亂す

是れに由つて狂心を起すこと 猶お癡なる猿猴の如し

但當に大乘を誦し 法の空無相を觀ずべし

永く一切の惡を盡くして 天耳をもつて十方を聞かん

鼻根は諸香に著して 染に隨つて諸の觸を起す

此の如き狂惑の鼻 染に隨つて諸塵を生ず

若し大乘經を誦し 法の如實際を觀ぜば

永く諸の惡業を離れて 後世に復生ぜじ

舌根は五種の 惡口の不善業を起す

若し自ら調順せんと欲せば 勤めて慈悲を修し

法の眞寂の義を思うて 諸の分別の想なかるべし

心根は猿猴の如くにして 暫くも停まる時あることなし

若し折伏せんと欲せば 當に勤めて大乘を誦し

佛の大覺身、力無畏の所成を念じたてまつるべし

身は爲れ機關の主 塵の風に隨つて轉ずるが如し

六賊中に遊戯して 自在にして罣礙なし

若し此の惡を滅して 永く諸の塵勞を離れ

常に涅槃の城に處し 安樂にして心愴怖ならんと欲せば

當に大乘經を誦して 諸の菩薩の母を念ずべし

無量の勝方便は 實相を思うに従つて得

此の如き等の六法を 名づけて六情根とす

一切の業障海は 皆妄想より生ず

若し懺悔せんと欲せば 端坐して實相を思え

衆罪は霜露の如し 慧日能く消除す

是の故に至心に 六情根を懺悔すべし

是の偈を説き已つて、佛、阿難に告げたまわく、

汝今是の六根を懺悔し普賢菩薩を觀ずる法を持つて、普く

十方の諸天、世人の爲に廣く分別して説け。佛の滅度の後、

佛の諸の弟子、若し方等經典を受持し讀誦し解説すること

あらば、應に靜處の若しは塚間、若しは樹下、阿練若處に於

て、方等を讀誦し大乘の義を思うべし。念力強きが故に我が

身及び多寶佛塔、十方分身の無量の諸佛、普賢菩薩、文殊

師利菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩を見たてまつることを得ん。

法を恭敬するが故に諸の妙華を持って空中に住立して、

行持法の者を讚歎し恭敬せん。但大乘方等經を誦するが故

に、諸佛、菩薩晝夜に是の持法の者を供養したまわん。

佛、阿難に告げたまわく、

我賢劫の諸の菩薩及び十方の佛と、大乘眞實の義を思う

に因るが故に、百萬億阿僧祇劫の生死の罪を除却しき。此の

勝妙の懺悔の法に因るが故に、今十方に於て各佛となる

ことを得たり。若し疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと欲せ

ん者、若し現身に十方の佛及び普賢菩薩を見んと欲せば、當

に淨く澡浴して淨潔の衣を著、衆の名香を焼き空閑の處

に在るべし。應當に大乘經典を誦讀し大乘の義を思うべ

し。

佛、阿難に告げたまわく、

若し衆生あつて普賢菩薩を觀せんと欲せん者は、當に是の

觀を作すべし。是の觀を作す者は是れを正觀と名づく。若し

他觀する者は是れを邪觀と名づく。佛の滅度の後、佛の諸の弟子、佛の語に隨順して懺悔を行ぜん者は、當に知るべし、是の人は普賢の行を行ずるなり、普賢の行を行ぜん者は惡相及び惡業報を見じ。其れ衆生あつて、晝夜六時に十方の佛を禮したてまつり、大乘經を誦し、第一義甚深の空法を思わば、一彈指の頃に百萬億阿僧祇劫の生死の罪を除却せん。此の行を行ずる者は眞に是れ佛子なり、諸佛より生ず。十方の諸佛及び諸の菩薩、其の和上となりたまわん。是れを菩薩戒を具足せる者と名づく。羯磨を須いずして自然に成就し、應に一切人・天の供養を受くべし。

爾の時に行者若し菩薩戒を具足せんと欲せば、應當に合掌して、空閑の處に在つて遍く十方の佛を禮したてまつり、諸罪を懺悔し自ら己が過を説くべし。然して後に靜かなる處にして十方の佛に白して、是の言を作せ、

諸佛世尊は常に世に住在了たもう。我業障の故に方等を信ずと雖も佛を見たてまつること了かならず。今佛に歸依したてまつる。唯願わくは釋迦牟尼佛正遍知世尊、我が和上と爲りたまえ。文殊師利具大悲者、願わくは智慧を以て我に清淨の諸の菩薩の法を授けたまえ。彌勒菩薩勝大慈日、我を憐愍するが故に亦我が菩薩の法を受くることを聽したもうべし。十方の諸佛、現じて我が證と爲りたまえ。諸大菩薩各其の名を稱して、是の勝大士、衆生を覆護し我等を助護したまえ。今日方等經典を受持したてまつる。乃至失命し設い地獄に墮ちて無量の苦を受くとも、終に諸佛の正法を毀謗せじ。是の因縁、功德力を以ての故に、今釋迦牟尼佛、我が和上と爲りたまえ。文殊師利、我が阿闍梨と爲りたまえ。當來の彌勒、願わくは我に法を授けたまえ。十方の

諸佛、願わくは我を證知したまえ。大徳の諸の菩薩、願わくは我が伴と爲りたまえ。我今大乘經典甚深の妙義に依つて佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すと。是の如く三たび説け。

三寶に歸依したてまつることを已つて、次に當に自ら誓つて六重の法を受くべし。六重の法を受け已つて、次に當に勤めて無礙の梵行を修し、曠濟の心を發し八重の法を受くべし。此の誓を立て已つて、空閑の處に於て衆の名香を燒き華を散じ、一切の諸佛及び諸の菩薩、大乘方等に供養したてまつりて、是の言を作せ、

我今日に於て菩提心を發しつ。此の功德を以て普く一切を度せん。

是の語を作し已つて、復更に一切の諸佛及び諸の菩薩を頂禮し、方等の義を思え。一日乃至三七日、若しは出家、在家にても、和上を須いず諸師を用いず白羯磨せざれども、大乘經典を受持し讀誦する力の故に、普賢菩薩の助發行の故に、是れ十方の諸佛の正法の眼目なれば、是の法によつて自然に五分法身、戒、定、慧、解脱、解脱知見を成就す。諸佛如來は此の法より生じ、大乘經に於て記證を受くることを得たまえり。

是の故に智者、若し聲聞の三歸及び五戒、八戒、比丘戒、比丘尼戒、沙彌戒、沙彌尼戒、式叉摩尼戒及び諸の威儀を毀破し、愚癡、不善、惡邪心の故に多く諸の戒及び威儀の法を犯さん。若し除滅して過患なからしめ還つて比丘となつて沙門の法を具せんと欲せば、當に勤修して方等經典を讀み、第一義甚深の空法を思うて、此の空慧をして心と相應せしむべし。當に知るべし。此の人は念念の頃に於て、一切の罪垢

永く盡きて餘なけん。是れを沙門の法戒を具足し諸の威儀を具すと名づく。應に人・天一切の供養を受くべし。若し優婆塞、諸の威儀を犯し不善の事を作さん。不善の事を作すとは、所謂佛法の過惡を説き、四衆の所犯の惡事を論説し、偷盜、姪姪にして慚愧あることなきなり。

若し懺悔して諸罪を滅せんと欲せば、當に勤めて方等經典を讀誦し第一義を思うべし。若し王者、大臣、婆羅門、居士、長者、宰官、是の諸人等貪求して厭くことなく、五逆罪を作り、方等經を謗し、十惡業を具せらん。是の大惡報應に惡道に墮つべきこと暴雨にも過ぎん。必定して當に阿鼻地獄に墮つべし。若し此の業障を滅除せんと欲せば、慚愧を生じて諸罪を改悔すべし。

佛の言わく、

如何なるをか刹利、居士の懺悔の法と名づくる。刹利、居士の懺悔の法とは、但當に正心にして三寶を謗せず、出家を障えず、梵行人の爲に惡留難を作さざるべし。應當に繫念して六念の法を修すべし。亦當に大乘を持つ者を供給し供養し、必ず禮拜すべし。應當に甚深の經法、第一義空を憶念すべし。是の法を思う者、是れを刹利、居士の第一の懺悔を修すと名づく。

第二の懺悔とは、父母に孝養し、師長を恭敬する、是れを第二の懺悔の法を修すと名づく。

第三の懺悔とは、正法をもつて國を治め人民を邪枉せざる、是れを第三の懺悔を修すと名づく。

第四の懺悔とは、六齋日に於て諸の境内に救して、力の及ぶ所の處に不殺を行ぜしめ、此の如き法を修する、是れを第四の懺悔を修すと名づく。

第五の懺悔とは、但當に深く因果を信じ、一實の道を信じ、佛は滅したまわずと知るべし。是れを第五の懺悔を修すと名づく。

佛、阿難に告げたまわく、

未來世に於て、若し此の如き懺悔の法を修習することあらん時、當に知るべし、此の人は慚愧の服を著、諸佛に護助せ

られ、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

是の語を説きたもう時、十千の天子は法眼淨を得、

彌勒菩薩等の諸大菩薩及び阿難は、佛の所説を聞きたてまつりて歡喜し奉行しき。

觀普賢菩薩行法經